

石井 小
 送付先名簿を改訂中
 一、この日、赤坂ビル202号
 関西地質学会
 新入会費名
 木下 浩一
 木下 浩一
 木下 浩一

日本地質学会関西支部報

第 5 2

1964年4月30日

京都大学理学部地質学鉱物学教室内
 日本地質学会関西支部

1963年11月9日

大阪科学技術センターにおける例会講演の4.

徳島平野を主とする四国東岸の第四系

中 村 幸 三、須 崎 和 己 (徳島大学)

1960年より続けられている「吉野川第四系研究」の団体のこれまでの成果及び1962年より行なっている鳴門～徳島～小松島～橋地城の地耐力調査の研究資料により、考察されることを報告した。これに伴い、数種の図表を配布した。

概然、本地域の第四系の層序及対比を示すと示す表の如くなる。

第一表 徳島平野を中心とする第四系

	吉野川北岸	吉野川南岸	勝満川沿岸	海岸平野	註
沖積世	新開礫層 大山礫層	西麻加礫層		徳島～勝満川：A層 鳥羽～徳島：B層 扇砂層：C層	下層の地層は0.5Mに よる14500±500年
洪積世	土柱礫層(厚さ80m-) (扇状地～扇状堆積物)	山路礫層(厚さ30m-) (扇状地～扇状堆積物)	冠江層(厚さ10m±) (30～40m段丘堆積物)	北島層：E層 /?	他に勝満川礫層、桑野川礫層にも礫層、礫質粘土層等があるが、お互いの連関がむづかしくて未解決のままにしておく
洪積世	馬場礫層(20m+) (扇状地堆積物)	川島礫層(20m±) (50m±段丘堆積物)	皇谷礫層(10m-) (60～70m段丘礫層)		
洪積世	切戸礫層(20m+) (45m±段丘堆積物)		榑湖礫層(1～2m) (80～90m段丘礫層)		
洪積世	森山粘土層	森山粘土層			

徳島平野を中心とする第四系
 中村幸三、須崎和己
 1964年4月30日
 京都大学理学部地質学鉱物学教室内
 日本地質学会関西支部

簡単に特徴的なことをあげると、吉野川北岸、南岸とも各層の間には不整合が認められる。切戸礫層及び川島礫層は、何れも、結晶片岩礫、和泉層群由来の砂岩、凝灰岩礫をもち、円～亜円礫である。又礫の並び方を総合して、氾濫原の堆積物であることがわかる。馬場礫層は、和泉層群由来の砂岩の巨礫を特徴的に含み円磨度は円～亜円であり、礫の表面は褐鉄鉱による褐色化がめだつ。又結晶片岩の礫は認められない。礫層以外に数枚のシルト～細粒砂層又はレンズを夾む。扇状地堆積物と考えられる。土柱礫層及び山路礫層は、それぞれ後背地の和泉層群、結晶片岩の角～亜角礫のみよりなる礫層を主とするが、土柱礫層の場合は最下位近くに、植物の根、幹、葉、花粉等を含む粘土～シルト層がある他数枚のシルト層を夾む。これらの化石鑑定の結果は、現在の気温より若干寒い針葉樹林の勝った層であることがわかる（氷河期の末期のものとして推定される）。新期礫層並びに大山礫層、西麻植礫層は何れも現世と考えられる。軟弱な未だ変色しないマトリックスにより充てんされた礫層である（現世の扇状地堆積物といえる）。

勝浦川沿岸では、各層は全て孤立しているため、その分布高度以外には相互の関係はわからない。ただし、橋崎礫層のマトリックスは赤色土化し、星谷礫層のマトリックスは黄褐色化している。何れも円礫である。沼江層には青色粘土質を中位にもち、木材片、藍鉄鉱を含んでいる。

以上の原川以外に勝浦川、園瀬川、桑野川流域の第四系の概要も判明しているが省略する。但し桑野川流域では、赤色土化した礫層の上に粘土層があり、その粘土層中より産出する亜炭の花粉分析では、広葉・針葉樹林で草本類が多く（恐らく間氷期のものであろう）且土柱層中の含植物層よりも、扇状地が著しいことがわかっている。

平野部では、第一表の如く徳島層、北島層に2分されるが、徳島層は更に上よりA、B、Cの3層に分けられる。徳島層中のC層はその分布が限られ、B層基底が-20m以下には存在しない。C層は貝殻、腐植土をもち、瀬海成層と推定される。B層は、全体として貝殻をもち、又火山灰の層を特定の層準に持つことの多い粘土～シルトの層であり、時にはその中位に砂～砂礫の層を夾むことがある。又その中に腐植土の層をもつこともある。この砂～砂礫層はその分布よりして当時の湾入部の口～湾口に形成された砂州～海底砂州を示すものといえる。火山灰の重鉱物中に紫蘇輝石、普通輝石、少量の普通角閃石を含み鉄鉱その他不明鉱物がみられることより、複輝石安山岩質の火山活動ともなって噴出したものと考えられる。これは四圍の高地にみられる「赤おんじ」（＝上部ローム層）に対比できそうである。尚橋崎の岩芯より得た腐植土の層のC₁による絶対年代では14500年±500年という値が出ている。A層は海岸より内陸に行くに従い、細砂→砂礫となる。細砂では貝殻破片植物片をふくむ海成層であるが、砂礫層には貝殻を含まず河成層と考えられる。海岸部では下位より上部にゆくに従い細粒（シルトの場合もあり）→粗粒の変化が認められる。又時には沿海よりやゝ内部で最上部に数m以下の砂質シルトの層を認めることがあるが、これは砂州の背後に生じた後背湿地、河川の流路の左右に生じた後背湿地等の堆積物と推定される。尚、鮎川下流には著しい砂礫層が発達している部分がある。

北島層については、数本の深井により、その概要を知るしか方法がないが、青灰色～褐色～赤褐色の砂礫層と硬い粘土の互層よりなる。徳島平野中心部では200m以下まで本層の分布し

ていることがわかる。しかし細分化は資料不足のため今のところできない。徳島層と本層とを識別する資料は、次のようなものである。

1. 本層の上に腐植土層がのっていること。
2. 徳島層とは色が異り褐色～赤色化していること。
3. B層基底の等高線図からもわかるように本層を刻んだ谷が多く存在する。

尚北島層中には貝の破片は全くみられず、且上記2の理由から、少くとも北島層の上部は河成の洪積層と考えられる。

第四系を切断する断層は次のようなものがある。

1. 北岸、土柱層を和泉層群が局部的に衝上している。
2. 同じく土柱層中に東西性、及南北性の断層があり、東西性のものは、地形に影響を与え、南北性のものは天然記念物「土柱」の中の縞模様を変化させている。
3. 南岸、山路礫層と結晶片岩が南北性の断層を以て接している。(鴨島町山路の丘の上)
4. 森山粘土層にも、戦後の垂炭調査の際、東西性の断層が認められている。

以上の中、1. 2. 3.は何れも洪積世来～又はそれ以後のものとして、注目すべき断層である。

最後に、植物化石の鑑定をしていただいた大阪市大三木茂教授・粉川隆平博士、花粉分析をしていただいた高知大中村純教授、重鉱物分析をしていただいた東京都立明正高俊鈴木康司博士、 C^{14} による絶対年令を測定していただいた学習院大・木越研究室の方方、野外調査を共に行なった吉野川団研の諸氏に心から感謝の意を表したい。

1964年1月18日

京都大学における例会講演

1. $4CaO \cdot Al_2O_3 \cdot Fe_2O_3$ と $3CaO \cdot Al_2O_3$ の合成におよぼす MgO の影響

楠谷 悟(神戸大学 教育学部)

セメント化学研究の初期には、セメントを一つの化合物として取扱う傾向があったが、*A. E. Törnebohn* (1897) はセメントクリンカーを偏光顕微鏡で観察し、クリンカー中に4つの異なる結晶相を見付け、それぞれ *Alit*, *Belit*, *Celit*, *Felit* と命名した。これら結晶相の中で最も重要な水硬性化合物である *Alit* に関しては多くの研究がなされた。更に *A. Gutmann and F. Gille* (1927) は、*Alit*, *Belit*, *Celit* のほかの結晶相やガラス相についても調べた。引きつづきX線の研究から *Alit* は $3CaO \cdot SiO_2$ が主体となるもので、また *Belit* は α & β $2CaO \cdot SiO_2$ が主体であることがわかった。*Felit* も $2CaO \cdot SiO_2$ 系であるが最近のセメントには認められない。*Celit* は *Alit*, *Belit* の結晶相を圍繞するいかにも鉄系の化合

物らしい外観を呈する褐色部分である。その構成化合物は $4CaO \cdot Al_2O_3 \cdot Fe_2O_3$ (Brown-millesite) であると考えられているが、この化合物についてはまた異説もある。

筆者は普通ポルトランドセメントの配合や $CaO-SiO_2$ 系に MgO を添加したときの焼成における反応速度や結晶相の成長についての影響も既に研究したのであるが、今回は MgO の影響が特に顕著であった $CaO-Al_2O_3-Fe_2O_3$ 系について述べることにする。

$CaO-Al_2O_3-Fe_2O_3$ 系において、アルミン酸石灰化合物には C_3A ($3CaO \cdot Al_2O_3$)、 C_5A_2 、 CA 、 C_7A_3 等があり、ポルトランドセメント中には C_3A がときには C_5A_2 が存在し、アルミナセメントには CA がときには C_5A_3 、 C_3A 等が存在する。 C_3A は極めて速やかに水和水和に際して発熱が激しい。これは強度に余り関与しない。鉄系化合物では C_4AF ($4CaO \cdot Al_2O_3 \cdot Fe_2O_3$)、 C_2F 、 CF 等があるが普通ポルトランドセメントには C_3A_2F もできているという説もある。 C_4AF は速やかに水和水和するが C_3A 程の水和熱はない。 $CaO-Al_2O_3-Fe_2O_3$ 系の焼成において、主な結晶相のうち C_3A の生成はなるべく押え、 C_4AF の多いことがのぞましいわけである。

筆者は $CaO-Al_2O_3-Fe_2O_3$ 系において、上述の目的にそう配合を発見するため次の三角図表(並びに表1)に示した配合比に MgO を添加した影響について調べた結果をこれから述べる。

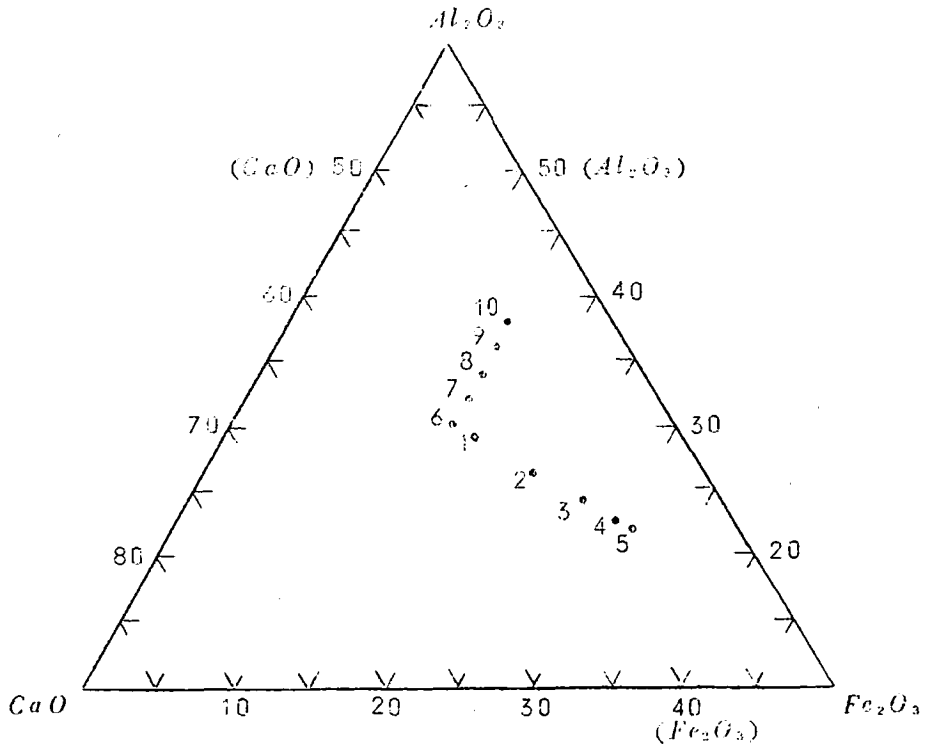


図 1

CaO-Al₂O₃-Fe₂O₃系の配合

試料番号 \ 配合比	CaO%	Al ₂ O ₃ %	Fe ₂ O ₃ %
1	54.22	29.35	16.43
2	51.53	26.56	21.91
3	49.38	24.33	26.29
4	47.95	22.84	29.21
5	47.11	21.96	30.93
6	55	30	15
7	53	32	15
8	51	34	15
9	49	36	15
10	47	38	15

表 1.

先ず三角図表上に示した1,3,5の試料に、それぞれMgOを0,1,2,3,4,5%添加し、1300°Cにて30分焼成した試料について調べた。

C₃Aは $d=2706 \text{ \AA}$, C₄AFは $d=2649 \text{ \AA}$ の回折線の高さによって成長の度合を比較した。試料1ではMgO 0%即ち、添加しないときには、C₄AFよりC₃Aの回折線の高さがやゝ高い程度のものが、MgO 1%添加ではC₃Aの回折線が極端に高くなり、C₄AFの方はかえって低くなった。2,3,4,5%の添加においても、1%添加のときと大体同じ傾向であり、試料3, 試料5についてもMgO添加の影響は余り明瞭でなかった。

次に1320°Cにて15分焼成した試料の場合、試料1ではMgO 0%のとき余り高くなかった。

C₃Aの回折線は1%添加のとき極端に高くなった。C₄AFは余り変化がなく、この傾向は2,3,4,5%添加の場合も余り変らなかつた。

試料5ではMgO 0%のとき、C₃AとC₄AFの回折線の高さは大体揃っており、MgOの添加においてC₃A, C₄AF共に若干高さを増すが、添加量による違いが明瞭でなかった。試料5では0%のときC₃Aの回折線がC₄AFのそれより若干低い程度が1%になるとC₄AFの回折線は急に高く、C₃Aの方は低くなり、3%になるとその差がひどくなった。3,4,5%の場合も大体同じであった。

以上のようにMgOの添加が結晶相の成長を支配していることが認められたので、更に配合試料を6,7,8,9,10と追加して、更めて1,2,3,4,5,6,7,8,9,10の配合試料について1350°Cにて15分焼成し、その結果を調べ、図2.3にまとめた。縦軸は回折線の相対強度、横軸はMgOの添加量を示したものである。

試料1……MgOの添加量を増すと、C₃Aは順次上昇するが、C₄AFは2%まで急激に増し、それ以後は余り変化がない。

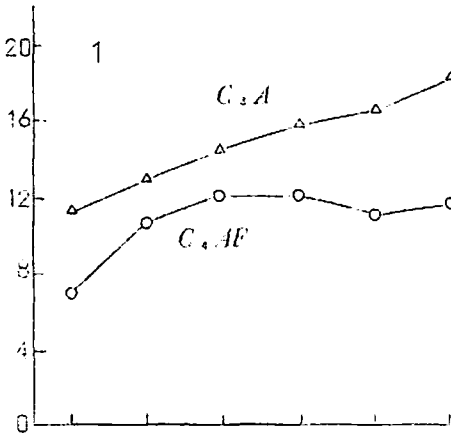
試料2……C₃AとC₄AFの相対強度が逆転し、C₄AFの方が強くなり、C₃A, C₄AF共にMgOの添加量を増すと、ほぼ直線的に上昇する。

試料3……C₄AFの方がC₃Aよりも最初から高く、C₄AFは3%まで急激に高くなっている。C₃Aは徐々に僅か高くなっている。

試料4……C₄AFはMgOの添加を増すと漸次上昇しているが、C₃Aは添加量の増加と共に減少している。

試料5……C₄AFは1%添加において急に上昇しているが、それ以後余り変化がない。C₃A

同析線の強度



強度

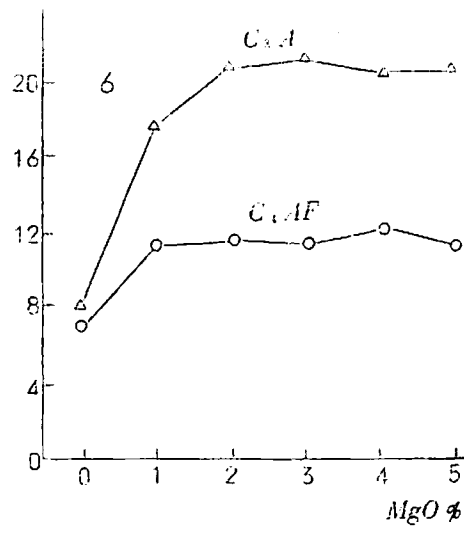
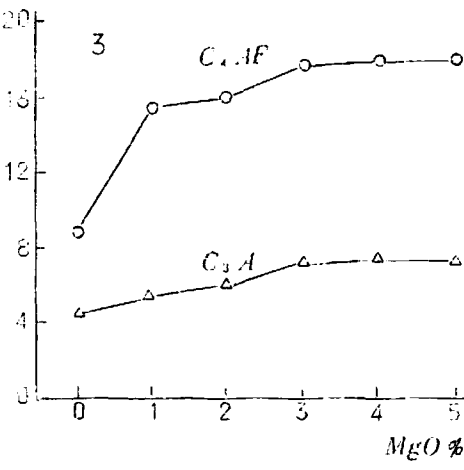
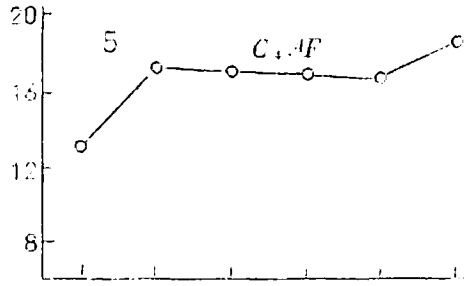
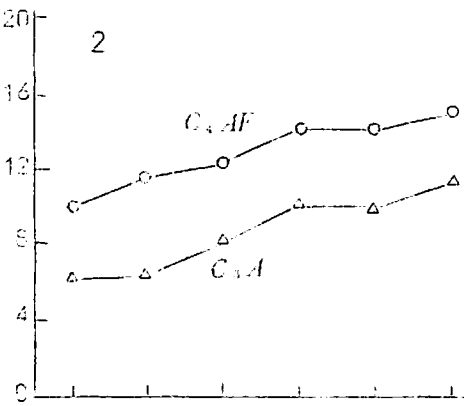
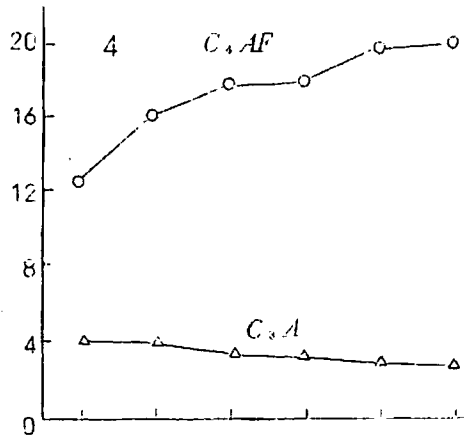


図 1

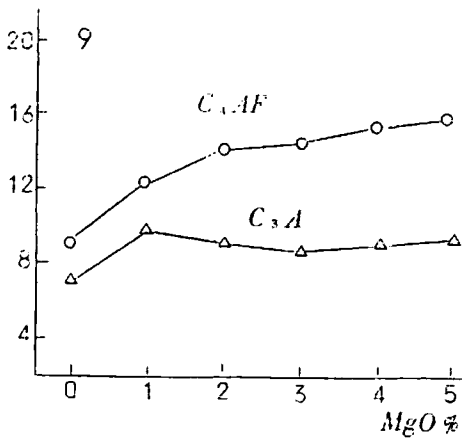
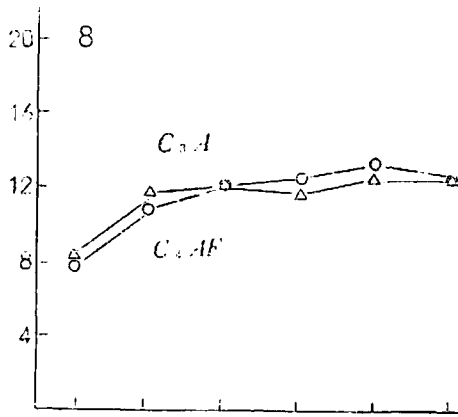
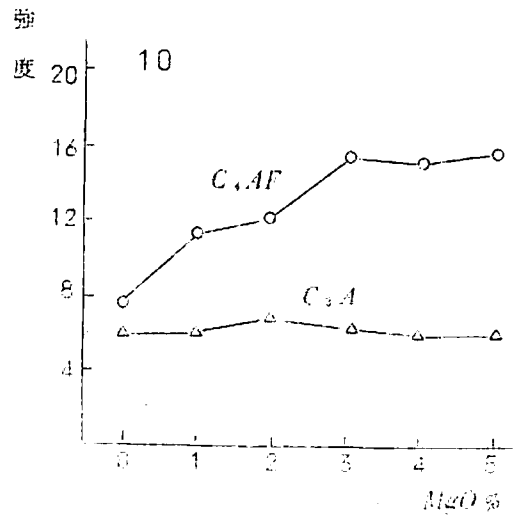
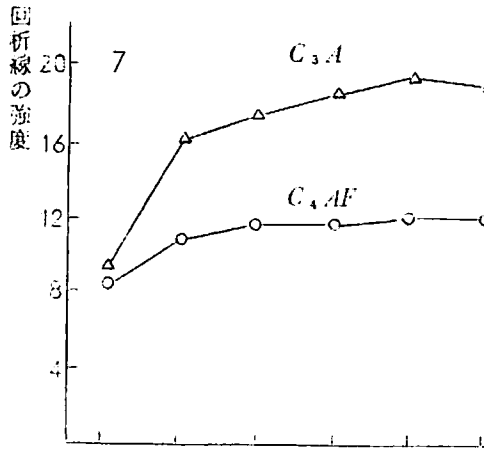


図 2

はほとんど認められない。

試料6…… MgO を添加しないときは、 C_3A 、 C_4AF の回折線はほぼ等しい高さを示していたが、1%の添加において、 C_3A は急激に上昇するが、 C_4AF のものは僅かな上昇のため、その間に大きなひらきができる。

試料7……試料6の場合ほど顕著でないが、大体同じ傾向を示す。

試料8…… C_3A 、 C_4AF 共に MgO の添加で徐々に上昇するが、その間にひらきができない。

試料9…… C_4AF は MgO の添加とともに可成り上昇するが、 C_3A の上昇は極く僅かである。

試料10…… C_4AF は MgO の添加とともに漸次上昇するが、これに反し C_3A は変化しない。

<おまけ>

1. この実験は熔融状態からの結晶の晶出ではなく、焼成による固体反応に近い状態での生成であるが、 MgO 5%程度までは C_3A 、 C_4AF ともに結晶の成長が非常に促進されることが明らかとなった。
2. MgO を添加することによって、 C_3A の成長をおさえ、 C_4AF の成長を促進させることのできる割合の存在することがわかった。

2. *granitic magmas* の形成条件に関する2.3の基本的問題

松本 隆 (大阪市立大学)

従来、*granitic magma*の発生は、地殻を場として考えられてきた。筆者は、若し、*mantle*の結成が*eclogitic*な場合には、地下200Km以上の深さのところに、*granitic magma*の発生し得る条件があることを示したことがある。しかし、このモデルは、若し、*mantle*が*peridotitic*であれば、成立しない。

そこで、*mantle*が*peridotitic*であるばあいには、*mantle granite*の形成条件があるか否かを更に検討することにする。そのために、*model*として、まえと同様に、 $Mg_2SiO_4 - SiO_2$ の*binary system*をとることとする。

さて、 $Mg_2SiO_4 + SiO_2 \rightleftharpoons 2MgSiO_3$ ……(1) なる反応において、シリカが石英或いはカンラン石 シリカ キ石

コーズ石であると反応は左辺→右辺と進む。ところが、カンラン石とステインヨバイトとが夫々安定である圧力範囲では、右辺→左辺と進む筈である。このような条件では、 $Mg_2SiO_4 - SiO_2$ の*binary system*において、中間化合物として、 $MgSiO_3$ を考える必要がなくなるから、*phase diagram*は単純な*eutectic point*を示すものにならなければならない。ステインヨバイトの熱力学的データは最近、ステインヨフによって推定されたものが発表された。これを利用して、近似計算を行えば、190Kbの圧力下では、*stischovite molecule*がmol%で71%のところ*eutectic point*のあることがわかる。

このことから、マンツルの組成が *peridotitic* でも *C-layer* のトップ附近に *granite magma* が生成され得るといふモデルが得られたことになる。このモデルで問題になる点は、(*batholithic*) *granite magma* 形式のためには、*C-layer* トップの広範な部分が熔融現象に参加しなければならぬ点である。これは、*granite magma* の生成問題は、直接的に *geothermal history* に関係するということを示唆するものかもしれない。

更に、大規模な *granite magma* の発生を導びくようなマンツル内の *thermal state* が地殻変動の原動力として果す役割が大きいことを示すものかもしれない。具体的な地質学的なできごととしては、*late Cretaceous* の酸性活動が、このモデルに適合すると思われる。今後、このような観点から、*late Cretaceous* の酸性岩について必要な情報を得る見込みがある。

3. 島根県大東地域におけるモリブデン鉱床の研究 (I)

— とくにモリブデン鉱床と貫入岩体との関係について —

滝本 清・滝 種雄・佐野美則 (京大)

(I) はじめに

中国地方には中生代末期から第三紀初期にかけての火成活動に関係して、タングステンやモリブデンなどの鉱床が分布している。タングステン鉱床の生成は山陽地方に分布する広島型花崗岩と、またモリブデン鉱床は山陰地方に分布する山陰型花崗岩とそれぞれ密接に関連しているといわれる。大東地域のモリブデン鉱床は山陰型花崗岩に関連して生成したものと考えられ、太田鉱工場の大東鉱山、清久鉱業場の清久鉱山および妙中鉱業場の東山鉱山などの諸鉱山によって大規模に移行されている。現在日本におけるモリブデン鉱石産額の約70%が当地域で生産されている。

筆者らは、まず上記の鉱床群の鉱床学的研究の一環として大東地域をとりあげ、これまでに各鉱山の坑内外の地質および鉱床の調査を行ってきたが、各種岩体の貫入順序およびモリブデン鉱床の形成に密接な関係を有すると考えられる花崗岩などについて、従来の研究とは異なる若干の新知見を得たので、主としてその結果を報告する。なお各鉱床における母岩と富鉱部との関係、母岩の変質作用、産出鉱物の種類とそれらの生成順序などについても概要を報告する。

(II) モリブデン鉱床と貫入岩体との関係

調査地域は島根県松江市の南西約20 Kmの島根県大原郡大東町付近一帯で、最寄駅は国鉄木次線大東駅である。

当地域の地質は大別して新期に属する安山岩および石英閃緑岩と、古期に属する流成岩、ホルンフェルスおよび花崗岩とから構成されている。新期の岩体としては笹谷安山岩および清久石英

閃緑岩、古期の岩体としては金成ホルンフェルス、川井混成岩、磨石山花崗岩、大東花崗閃緑岩、蓮花寺花崗岩、大内谷花崗岩、本郷石英斑岩および下久野半花崗岩などの各種岩類が認められる。

これら各岩体の地質関係およびモリブデン鉱床と貫入岩体との関係は次の通りである。

(1) 川井混成岩と金成ホルンフェルスとの原岩が、当地域における最古の系列に属する岩体である。

(2) 大東花崗閃緑岩は貫入岩体中で最古のもので、これによって既存の川井混成岩と金成ホルンフェルスとの原岩の一部は変成された。

(3) つづく蓮花寺花崗岩の貫入によって前述の原岩は大規模な変成作用を受け、現在のような川井混成岩や金成ホルンフェルスが形成された。蓮花寺花崗岩中に点在する磨石山花崗岩も、本岩体貫入による花崗岩化作用を受けて既存の諸岩体から形成された。

(4) 東山鉱山本坑、清久鉱山本坑、大東鉱山本坑、同火の各坑などの主要鉱床は、いずれも蓮花寺花崗岩貫入後の後火成作用によって岩体の周辺部に形成された鉱床である。なお、この際に鉱床の母岩となっている川井混成岩は当花崗岩のルーフ・ペンダントの役割を果たして鉱床の位置を規制した。

(5) 蓮花寺花崗岩の貫入後に、引きつづいて大内谷花崗岩の貫入があり、これによって川井混成岩もしくはその原岩の一部は、現在みるような川井混成岩となり、これは本花崗岩のルーフ・ペンダントとして清久鉱山南坑および佐世坑などの諸鉱床の形成に重要な役割を演じた。

(6) 大内谷花崗岩は斑状組織をもった浅成の花崗岩であり、本郷石英斑岩はこれの急冷相に相当するものと思われる。さらに下久野半花崗岩は大内谷花崗岩と密接に関係して、相前後して貫入した岩体である。

(7) 新第三紀中新世に、笹谷安山岩の噴出があり、それにつづいて清久石英閃緑岩の貫入があった。これらは当地域の諸鉱床の進化作用とは無関係である。

地質学会長期計画委員会について

小 泉 光 恵 (阪大)

数年前から各学会および研究機関において、それぞれ長期計画が練られてきたが、このたび地質学会においても学術会議の要請により、地質学の長期計画をとり上げる運びとなった。これにつき昨年地質学長期計画討論会準備委員会世話人会が発足して、早阪一郎・渡辺武男・久野久・井尻正二・牛来正夫・森本良平・都城秋穂の7氏が世話人となり、昨年末には討論会が開催された。さらに同世話人会は、地質学会執行委員会と合議の末、2月上旬『日本地質学会長期計画委員会』を発足させて発展的解消することとなった。以来数回の長期計画委員会が開催され、討議が進められている。たまたま私は今まで開催された委員会に出席の機会を得た関係上、支部編集

委員の方から本委員会の活動状況を支部会員に周知するよう命ぜられた。この小文が長期計画に対する会員各位の関心を高めるのにいささかでもお役に立てば幸である。

1) 第1回委員会 2月22日 於東大

旧世話人会を代表して牛来正夫氏より本委員会成立までの経過報告があり、ついで渡辺武男氏から長期計画に関する学術会議の動静が報告された。委員会運営のために、委員長と事務局を設けることとし、都城秋穂氏(東大)が委員長に選出された。つぎに委員会の性格、使命および構成などにつき意見が交換され、(a)今年末までに地質学長期計画に関する意見をまとめ、明年学術会議へ答申すること、(b)地質学のビジョンとか地質学を良くする方向のことはなんでもとりあげることに、の2つが委員会の主な性格であることが確認された。なお、この問題の討論の進め方についての旧世話人会の一致した意見として、去る12月の討論会で井尻氏がつぎのような報告をされた旨、牛来氏から説明があった。

- a) 長期計画に関する討論の方式は、抽象的な事柄から、具体的な事柄へ(大きい問題から個々の小さい問題へ)。
- b) 将来の方向として、物理、化学、生物学、数学を大いにとり入れるべきである。
- c) 将来は実験科学の方向を強く押し進むべきである。
- d) 人造鉱物・人造岩石等、自然にない人造物を作り出してゆくべきである。
- e) 方法論であるが、地質学は *tectonic evolution* という観点から総合されてゆかねばならない。
- f) 自然改造・総合開発等に役立ち、生産と結びついた地質学をめざして欲しい。

2) 第2回委員会 3月14日 於東教大

前回の結論に基づき、重要な基本構想に関する全学討論を行なって大筋を一致させるため、下記3つのテーマにつき、各報告者の話を聞いて討論を行なった。

自然科学のなかにおける地質学の現状	荒牧重雄(東大)
地質学における実験科学の導入	小泉光恵(阪大)
地質学の体系の一試案と意義	藤田至剛(東教大)

講演と討論の要旨は、委員の手許に配布されている議事録に記録されているので、紙数の都合上ここに省略させていただく。また、資料蒐集のため、つぎの2つの分科会を発足させることとなった。

- a) 地学の体系およびカリキュラム分科会
- b) 研究および教育制度に関する分科会

3) 第3回委員会 4月3日 於東大

当日は地質学会年会の会期前日にあたり、東京以外在住委員の出席に好都合であるので、下記3氏から各地方の意見をまとめた講演があった。

地球科学の将来	鳥巣康男(宮大)
長期計画について	首藤次男(九大)

長期計画について 松本 隆 (阪市大)

なお、次回委員会は5月6日東教大にて開催の予定である。

4) 年会夜間小集会 4月5日 於埼玉大

長期計画に関する学術会議の動静ならびに本委員会の活動状況についてそれぞれ報告があり、長期計画そのものの基本線や今後の委員会の運営方式につき意見が交換された。

本委員会の活動に関する従来の経過は以上記したとおりであるが、すべての会合は公開であるので、限られた期限内に多くの方々の意見が十分に反映されるよう、委員以外の方でも積極的な意見のある方は会合に出席して講演したり、討論に参加されるか、最寄りの委員または直接委員長あてに口頭もしくは文書で意見を伝えられることが強く望まれている。

関西支部では、京阪神在住長期計画委員の希望により、第3回委員会に先立ち、去る3月21日京大において関西地区地質学長期計画討論会を開催し、今後推進すべき重要研究課題、カリキュラム、研究体制などについて意見の交換を行なった。なにぶん初めての会合であったので、まとまった結論に到達しなかったが、各研究者が置かれている位置の理解を相互に深めるには甚だ有効であり、今後この種の会合を重ねることを約して散会した。来る5月16日阪大教養部にて開催の支部総会において、この件につき再び経過報告ならびに討論が行なわれる予定である。

最後に参考のために記すと、関西支部関係の委員は下記の通りである。(アイウエオ順)

京阪神地区	市川 浩一郎 (阪市大)	小泉 光 忠 (阪 大)
	清水 大吉郎 (京 大)	玉 城 逸 夫 (阪工大)
	中 村 威 (阪市大)	中 山 勇 (京 大)
	松 本 隆 (阪市大)	森 本 信 男 (阪 大)
北陸地区	小 雲 健 二 (金沢大)	
四国地区	甲 藤 次 郎 (高知大)	宮 久 三千年 (愛媛大)

ニ ュ ー ス

◎ UMF・Cゾーン地質構造部門について。

UMF計画は本年度から始まり、Cゾーン地質構造部門では世話人を中心に計画がたてられ、5月17日(日)京大で全体の会議をすることになった。

C地区世話人 小島丈児・池辺展生・中沢圭二
同 事務局 市川浩一郎・清水大吉郎

研究目的は深層地質断面図の作成におき、そのために地質構造を正しく把握する。

実施方針として、予算が縮小されたのでテーマを重点化し、本年度は深層地質とくに古生層、変成帯・四万十帯に重点をおく。実施に当ってはその地域又は地帯について研究実績のある人

に重点をおく。

年度別に個別テーマをかえることを考慮する。

実施内容はつぎの通り。(カッコ内は世話人)

1. 本年度調査をするもの。

- a. 丹波帯主部(周山地域) (松下)
- b. 嶺家帯笠置以南の構造 (小島)
- c. 三波川南帯及び秩父累帯との関係と和歌山西部と徳島東部 (小島)
- d. 秩父累帯北帯とくにバウム系の層序, 層厚, 構造(和歌山西部と徳島東部) (須藤)
- e. 四方十帯の日高川帯と牟婁帯(和歌山西部) (中沢)

2. 本年度 Working Group を作るもの。

- f. 中国帯・三郡・古生層補充調査 (長谷)
- g. 秩父累帯南帯 (須藤)
- h. 新生代の地殻変動 (竹原)

3. 後年度実施するもの。

- i-j. 舞鶴帯・舞鶴帯
- k. 丹波帯西部(宇治地区・嶺家帯との関連)
- l. 内帯・後期中生代火成岩類(表成・深成岩類) (岩研でやる)
- m. 和泉・泉南群群下底の問題

⑤ 予算実行案(旅費・消耗品・賃金・計)の概(単位万円)

- 1. a. (1.2, 21.2, 5.6 計39万円)
- b. (1.0, 12.4, 3.4 計26万円)
- c. (1.4, 6.6, 2.4 計25万円)
- d. (1.2, 9.4, 2.6 計24万円)
- e. (1.4, 23.8, 6.5 計44.3万円)
- 2. f. (2.0, 0.8, 0.2 計3万円)
- g. (dに含む)
- h. (4, 1.6, 0.4 計6万円)

UMP地質構造部門C地域打合わせ会

5月7日(日)10時より

経過報告・計画案・報告・討論

京大地鉞教室

研究に参加される方, 関心をおもちの方々はぜひ御参加下さい。

庶務報告

1. 新年度役員選挙結果(4月24日締め切り)(総会で決定することになります)
支部長……松下進16票、池辺展生11票、吉沢甫11票、小島信夫8票。
阪神部会幹事(3名)……市川浩一郎9票、松本隆7票、笠間太郎5票、山際延夫5票、
中世古幸次郎4票、千地万造3票、中村威3票、市原実3票(以下略)
京都部会幹事(1名)……石田志朗10票、清水大吉郎4票、中沢圭二3票、中山勇3票、
志阪常正2票(以下略)
四国・北陸・山陰部会はまだ報告がありません。
2. 地質学長期計画に関する関西地区討論会 3月21日 京大地鉦教室
長期計画委員会委員の申し入れによって開催しました。(別稿参照)
3. 新年度から二年間の関西支部の事務は阪神部会の担当となり、一年は大阪市大でやって下さることになりました。
4. 昭和38年度関西支部の活動
総会 5月18日(土) 京大地鉦教室
例会 10月5日 京大地鉦教室
例会 11月9日(土) 大阪市立自然科学博物館
近畿を中心とする新日本の第四系について
四国部会大会 11月23~25日 香川大学
西日本支部との合同例会 12月6日 広島大学
同窓会 9日 — 広島県地質図の完成を記して
例会 1月18日(土) 京大地鉦教室
地質学長期計画に関する関西地区討論会 3月21日 京大地鉦教室
5. 関西支部報の発行
4650 1963年6月28日
4651 1964年1月10日
4652 本 号
4653 西日本支部報との合併号(5月発行の予定)